主な記事
2面　小教区紹介、ひと、典礼奉仕
　　司教館の窓から
3面　若い力、正義と平和全国集会
4面　聖マリ・ウージェニーと共に歩む
　　こうのとりのゆりかご
　　医療のともしび
　　教区スケジュール、書籍紹介

カトリック高松教区報

2010年11月7日（第139号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

希望持ち　共同体生きよう

高知地区教区民の集い　発表や司教様との対話

十月十七日（日）秋晴れのさわやかな日、江ノ口教会　聖園幼稚園にて、高知地区の「教区民の集い」が行われた。「私たちは神の民」（教会共同体を生きるために）をテーマとした。溝部司教様を初め司教館に滞在している青年たちを迎え、高知地区五教会から約百人が参加した。第一部はグループ発表と司教様との対話集会。第二部は「私たちは神の民」共同ミサ。

準備・・「養成の年」に当たる今年は、地区としてＮＩＣＥからの提言をうけ、福音宣教する教会の三要素「信仰、共同体、現実」をＫＪ法を用いて、確認作業を行った（六月）。この三要素の一つでも欠けた場合、教会が「キリストの体」から離れてしまうことを、一同は改めて確認した。さらにこの三要素が互いに補完関係にあることも理解してきた。これを積極的に生きるため、教区民の集いのテーマを「わたしたちは神の民」とし、「共同体を生きるためにどんな要素が必要とされるか？」の問いかけをもって、再びＫＪ法を用いて、グループごとで方向性を探ることを今回の準備に当てた（九月）。教区民の集いには各グループから以下のような発表があった。

①教会共同体を生きるため、希望をもって明日に向かう姿勢が目標。そのため愛することへの「養成」が常に必要となる。日々の秘蹟、祈り、信仰、貧しさ、がその基本となる。

②教会共同体には　愛、社会性、連帯、寛容、協力、誠実、信頼、奉仕があるが絶えず「成長する共同体」であるとの意識が大切なこととなる。

③教会共同体を生きるために必要なことは挨拶、みことば、動く力、聴く心、絆、召命、将来を考えることである。これらの要素は、人生の諸段階で「秘跡」が与えられていることと結びついているようだ。ちょうど「ひまわり」が光に向かって心を開いているように。

④「信仰」が土台―それは育てられていくもの、愛の実践へと。そのための組織、協力―それは社会への奉仕、宣教に向かう。その歩みによって「信仰」がさらに養われていく。その循環が教会共同体を成長させていくのであろう。

⑤（子ども、青年たちから）日曜日にしたいことが一杯ある。それを教会で皆で一緒にしたらどんなにか楽しいことだろう。教会をいろいろ楽しい場所にしていこうよ。

これらの方向性を発見しながら、来年の「教区宣教大会」に向けて、高知という地域の中で「どんな教会になりたいか」をさらに深めていきたいと考えています。

さて、教会でＫＪ法を使うのは、参加者一人一人の意見や思いが書き出され、その意見が最後まで大切にされていくからです。様々な意見をまとめる作業を通して、いつの間にか、信仰が分かち合われています。その中で次第に方向性が示されてきます。（聖霊の導きでしょうか）自然に「協力する教会」の喜びが現れてくるのです。

文責　諏訪神父

高知地区教区民の集い
ＫＪ法による分かち合い風景

高知地区教区民の集いに参加して

「教会共同体を生きるために必要な要素は何か」をテーマに「養成コース」を経て、教区民の集いに参加し、心に残ったことはやはり次のことでした。

教会の三本柱「１、信仰　２、共同体　３、現代社会」これらのバランスをとること、どれ一つ欠けても教会とはいえないこと、そしてその中心はイエス様であることです。

１、信仰について・・信仰の深まりの必要性。すなわち生活の中での聖書、生活の中での祈りの大切さを思い、信仰養成（みことばの分かちあい、聖書研究、典礼の勉強等）に参加し、信仰を深める機会を持つこと。

２、共同体について・・信仰を持って集まり交わりのある共同体であること。すなわち暖かく思いやりのある絆を大切にする共同体、協力、奉仕に参加すること。

３、現代社会・・証し人として、言葉や行動で愛の業に参与していくこと。すなわちパウロの言葉（いつも喜び、たえず祈り　すべてに感謝）が実践できる人に近づくこと。社会の現実に無関心にならないこと。

などなど心にとめておきたいと思いました。

今後、一致と再生に向けて地区大会で学んだことを具体的に実行していくために、司教様の「依存から脱皮して、自ら立ち上がれば再生できる」とのお言葉を胸に、どんな小さなことでも聖霊の助けを願いながら何かできることから行動を起こして、始めなければと思いました。

中島町教会　林　弥生

深い感謝でフェリペ神父を見送る
ドミニコ会士として日本宣教四十七年

聖ドミニコ修道院のフェリペ・ミゲル神父は十月十四日、松山の病院で帰天された。

若き日のフェリペ・シミゲレス・ガルシア神父

フェリペ神父様は、一九三七年スペインのレオン県ビリャガルシアという町に生まれました。一九六一年九月にドミニコ修道会の司祭として叙階され、二年後の一九六三年九月一日に二十六歳で日本にやって来ました。

サッカーが大好きで、元気で活発な青年神父様で、性格は細やかでまめ、心配事があるような顔を誰かがしていたら、必ず声をかけて相談に乗ってあげる、とても優しく思いやりのある神父様でした。日本食が大好きで、特にラッキョウの漬物が大好物「ラッキョウの神父さん」としても有名でした。生涯のうちで一番長い間働かれた愛光学園では、何にでも挑戦し、ある日の映画上映会では、自分自身が映写技師となって映写機を器用に扱ったり、旧聖トマス寮時代には、生徒達の昼食が間に合わないという出来事が起こった時、自らが車で何百食ものお弁当を運んだこともあったそうです。何に対しても一生懸命で、積極的、精力的に活躍された神父様でした。そして、亡くなる直前まで頑張り続けました。

日本に来てから最後まで、色々な教会、幼稚園、特に、聖トマス寮と愛光学園で、精いっぱいに働かれました。聖ドミニコ修道会、日本の教会、そして日本の社会の為に生涯をかけて尽くされたフェリペ神父様の功績をたたえ、深い感謝の気持ちでご冥福をお祈りしたいと思います。

福岡で黙想会開く
熱き思いを形に　高松塾
溝部司教様の下に青年集う

本誌前号で紹介しました高松塾との関連で、今回は八月二十七日～三十日に行われた黙想会の報告を致します。

この高松塾は、仮称ながら、溝部司教様の下で集う青年の集まりです。（司祭召命に限らず）青年が互いに生き方を見つめるための場を設けるという主旨で現在立ちあげてきております。

今夏は、塾立ちあげの第一回記念に、福岡県は新田原教会にて黙想会が開催されました。テーマは広い意味での「召命」。総勢八名の中には、四国だけでなく、鳥取や遠く関東の方もいました。

四日間の黙想を通し、仲間としてのよい分かち合いが出来たと思います。朝昼晩の祈り、様々な神父様方の講話を受けての黙想・分かち合いが主なプログラムでした。神父様方が心を込めて語って下さったご自身の召命観は、生き方を見つめるヒントになったと思います。そして、分かち合いでもお互いに想いを語り合い、非常に良い雰囲気の中で過ごすことができました。各塾生の想い・講師の方々のメッセージは様々でしたが、共通していたことがあります。それは、出会い・仲間との交わり・祈りの大切さでした…。

そもそも、この四日間は沢山の支えを頂いて実現したものでした。特に新田原教会の皆様は、信徒会館を解放し、毎度美味しい食事と地元産の新鮮な果物を沢山提供して下さいました。黙想の糧を下さったと思います。また、他にも多くの方々から少なからぬご支援を頂きました…。

この塾は、立ち上がったばかりですが、今、確実に何かが生まれてきております。塾の発展と一人一人の召命のため、皆さま、どうかお祈り下さい。

最後に、〝熱い想い〟を共有できる仲間がもっと集まってくれることを希望しています。

高松塾第一期生　高山　徹

お礼とご報告

故松本淑子様の御遺言により教区一粒会に５６０万円余りのご寄付を賜りました。心より感謝申し上げますとともに故人のご冥福を心からお祈り申し上げます。

高松教区長 溝部　脩

はばたき

カトリック新聞九月二十六日の「意見異見私見」で「司祭・修道者の老後を考える」を読んだ方もいるでしょう。司祭だけでなく、国民年金受給者や年収百万円以下の人が収入の範囲内で利用できる一般の介護施設となると、特別養護老人ホームの多床室が主となります。

現在特老の多床室と個室の割合は七十五％対二十五％です。厚生労働省は「介護老人施設は在宅介護が困難な要介護高齢者が常時介護を受けつつ日常生活を送る場であり、要介護高齢者の尊厳保持の観点から、新設の施設については個室とすることが必要である」として、平成二十六年度までに七十％を個室（ユニット型）にするという目標を推進しています。

高知県内の特老のうち開設年が昭和四十三～六十三年で未改築施設が全体の約三分の一を占めています。私が勤務している施設もその一つです。今年の改築に当たって大きな問題が発生しました。全室個室（ユニット型）にすると、前述した方々が、本人の収入では利用出来る一般の介護施設が無くなることです。そこで、私たちは二十床を多床室にする事にしました。二人部屋でも各々に扉と洗面所を設け、壁で仕切り上を欄間的にし、準個室化するのです。扉は一つであっても、中は二つに仕切られた多床室を考案しているところもあります。

人権の尊厳を環境面でも追及しているのです。

教会もみんなが「神の民」となれる協力宣教司牧態勢を取れるよう努力していきたいものです。

司教館の窓から
司教のひとりごと

長崎教区典礼研修会に講師として赴いた折り、フランコ・ソットコルノラ神父より、「記念する」ということについて、二時間講義を受けた。ヘブライ語で「zakar」という単語を使っている。「記念する」というと、何か、昔々のことを思い出す位の意味でとられがちであるが、「zakar」は、神がして下さったこと、して下さっていることを思い起こし、そのようになるよう祈ることを指している。神は今働いて、人の救いを成就させているのである。

ミサの中で、「記念しなさい」との命令をイエスはしている。イエスが十字架上で死んだこと、復活したことを記念するのだ。しかも、これを通して、キリストのいのちに生きている自分を思い起こす。単なる思い出ではなく、実際にミサを通して主が私達に働いておられることを思い起こし、感謝し、新しいいのちに生きるのである。

長崎教区での典礼研修会、その熱気は、十分に私に伝わった。教会は確かに刷新されつつあるとの実感である。

小教区紹介
中村教会

四万十川の清流を思い描きながら自然豊かな海沿いの道を走っているうち、思いがけず目の前に明るい街が広がって来た。辺境の地にある中村教会というイメージは瞬時に消え去った。その四万十川支流、後川沿いに民家の赤い屋根に十字架を載せた中村教会があった。高知地区といっても高知市から百三十キロも西に位置する中村はやはり遠かった。その為か高知地区における人的交流も疎遠になりがちのようだ。現在の建物は献堂三十二年になる。主日のミサはフィリピン国籍信徒と日本人信徒が共に捧げたいとの思いから、別々に捧げていたミサを三年ほど前から十一時の一つのミサにした。月に二回は土佐清水に出かけてミサを捧げている。信徒台帳にはフィリピン国籍信徒百人、日本人三十人程がいるが、ミサには平均十五人程の参加があり、遠くは大正という町から車で一時間半もかけて通って来る信徒もいる程で、遠く津々浦々から集まって来ている。

フィリピン女性が活躍

クリスマスにもなると夫婦連れで百名を超える参加者で溢れかえるとのことだ。ちなみに信徒会長はフィリピン人女性が担われていて全体を和気あいあいの雰囲気に包んでいた。ミサは基本的に日本語で捧げられ、二つの朗読と福音は英語で再読される。聖歌は典礼聖歌の他タガログ語、英語で、持ち前の明るさをもっていた。ミサ後は恒例の持ち寄りの料理を頬張りながら、情報を交換する習わしになっているようで、私たちもチャッカリと勧めに従った。温厚で優しさにあふれるトーマス・マヘル神父様は司牧のかたわら教誨師とＡＡ（注参照）の指導にも熱心に取り組まれているが、小教区財政の脆弱さもあり、時にはホテルの結婚式を引き受けて教会財政の助けに貢献されている。

谷口広海

（注）ＡＡ＝Alcoholics Anonymous（アルコホーリクス・アノニマス）アルコール依存症者の回復に向けて活動をしているグループ

大阪・京都・高松三教区
ホームページ研修会

徳島教会からは二人が参加しました。二人とも方向オンチ。「Yahoo!地図」から印刷した一枚の大阪のカテドラル周辺の地図だけを持って午前十時四十五分に徳島教会を出発しました。大阪までは無事に行くことができたけれど、環状線に入って「森之宮」出口を探しながらいつの間にか一周、二周、（もしかしたら三周）回りました。携帯電話で徳島教会の友に環状線からカテドラルまでの道をナビしてもらって午後一時によようやくカテドラルに着きました。

研修会では三つの話がありました。

一つ目はホームページのルールについて。小教区内の情報を載せる手順、載せられる人の言葉や写真の許可、著作権についての話でした。当たり前かもれませんが、まず載せる前に本人の許可が必要です。

二つ目は　京都教区の利用情報の話でした。信者の中でパソコンを持っている人の数、教会にホームページがある事を知っている人の数、そのホームページを見た事がある人の数、などの発表がありました。この結果から、ホームページに向いた内容や、対象者を絞る事ができ、ホームページのデザインにもつながります。

三つ目は、お互いのホームページを見てアドバイスを交換する事でした。どれも面白かったです。参加した二人の間で「いい刺激になったな」と言いました。

一つ忘れていました。研修会の中で、教会へのアクセス（地図）の大切さが話されました。まず教会に来てほしいなら分かりやすい地図が必要です。ここまで読んでくれたらちゃんと最後までお願いしますね。地図の話につながります。

この方向オンチの二人がカテドラルを出る前に帰り道を尋ねました。出発して無事に高速道路に乗りました。しばらく行ったら国道に降ろされました。おまけに、あと二十九キロで関西空港の表示！ええ?!戻りましょう！向きを変えて、高速に再び乗りました。どこ間違えたかな―？

と話しながら西大阪方面に行こうと決めました。徳島は大阪の西にあるからさ、と。しばらくして神戸の看板が見えました。確か四十三という数字でした。よし。え？また降ろされたか?!ここはどこ？まず高速にまた乗ろう。そうそう。あっちにグリーンの看板がある、あっちに行こう。何だか工場地区の誰も通らないような道を通って、やっと何とか高速にみたび乗ることができました。湾岸線でした。これでいい！湾岸線？なんか聞いた事がある。左側の車線を走っています。教会のホームページの事を話しながら・・・え？もしかして右側におらんと・・・また降ろされた。今度は六甲アイランド。アウトレットショップがあるところだな。買い物しようか。今何時？六時。いやいや、もう一度高速に乗ろう。明日仕事があるから。四回目に乗ったら、今度は車がいっぱい。右側に徳バスの高速バスが通って、見て！徳島駅行きじゃ！ついていこう！それでなんとか無事に帰る事ができました。ホームページに分かりやすい地図が大切なこと、深く思い知りました。とくに方向オンチの人のために。

カトリック徳島教会
ジョン・ジェイコブセン＆
岡田、電話で指導してくれたマリオ

ひと
徳島　鳴門教会
教会の宝　麿渕（まぶち）　龍（りょう）（71歳）さん

「りょうちゃん、りょうちゃん」と誰からも慕われ頼りにされ、そこにいるだけで何か安心する人です。鳴門教会が設立される以前からの信者さんです。洋服仕立業を始めてから５６年、わたしはいつもヨゼフ様の仕事を連想させられます。８０年も前のミシンを大事に使い、ミシンだけでなく、アイロンや仕事机、ハサミなど、先代と一緒に仕事をしていた時の道具を今でも大事に使っています。

３５～６年も前に、仕立業と一緒に洋服病院として、繕いや仕立直しの仕事も取り入れました。当時としては珍しい仕事でした。それは人から喜ばれるし、服を大事にする心から生まれたものだとわたしは思います。お父様は信者でないのに、りょうちゃんに「何時も神父様の隣に居れ」と言っていたそうです。鳴門教会設立前からレジオ・マリエに携わり、長い間信徒会長も務めました。レジオ・マリエのおかげで信仰もより深められたそうです。教会だけでなく町内会、消防団といった奉仕活動にも参加し、徳島県では初めての献血の奉仕を３０年間も続け、表彰も受けました。何時までもお元気でわが鳴門教会の主でいて欲しいものです。

鳴門教会　野口洋子

『典礼奉仕』のために ⑪
高松教区典礼委員　稲毛利之師

復活を体験する典礼④

芸術の秋がやってまいりました。「紀子の食卓」という日本のサイコホラー映画があります。心臓の悪い人は見ないほうが良い映画ですが、テーマは「家族愛」「アイデンティティー」を扱っています。

「わたしたちの日常は一見、平和で和気あいあいに見えるが、その実はむなしい虚構でしかない。家族団欒がその最たるもの。そして本当の自分（アイデンティティー）なんていうのもすべて偽物――こういう状況からどうやって自分を解放するのか？」

これがこの映画のメッセージになっているようです。

元々こういったテーマは宗教が見つめてきた問題でした。親鸞聖人はかくの如く語りました。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」本来宗教は、生きる上でこういった真実を前提とし、教えます。そらごと、たわごとの真中で翻って現実を肯定する、目に見えるこの世界を改めて肯定する強さというか、覚悟や凄味に人を導くものです。キリスト者ならこう云うでしょう。「ただキリストのみぞまことにおわします。」日常のもろもろの問題に気安く答えてくれるものを求めるのです。そしてそれが宗教だと勘違いしているのです。

ミサに人が集まらないと良く聞きます。それは当然です。そらごと、たわごとの中に何かがあると、われわれは夢想してしまっているからです。「ただキリストのみぞまことにておわします。」これを知っていれば、おのずとミサに足が向くでしょう。御ミサなしには生きられないはずです。

預言者エレミヤは預言して叫びました。「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている。」（エレミヤ六・十四）

先の映画の中でも、家族の再生のプロセスの中でたくさんの狂気が通り過ぎ、たくさんの血が流れました。

十字架の聖テレジア・ベネディクタはこんな風に言っております。「世界は至る所炎に包まれている。主の十字架の御血だけがそれを消すことができる。」

復活（死と再生）を体験するには、まず現実を〝観〟なければなりません。そらごと、たわごとのなかでどのようにこの現実を肯定できるのですか？生きていくのは素晴らしいことだと、どうしたら心から言えますか？あなたの周りの〝柴〟が燃えているのが観えますか？すべての応えは主の十字架上にあります。あなたは十字架に何を観ますか？あなたが神に何かを願う前に、神があなたに問うておられるのです。

典礼とは神の問いと願いに直面させられる場なのです。そして人は神の問いに答えなければなりません。答えから逃げることは誰もできません。そしてその答えこそ、復活体験なのです。

「あなたは何処にいるのか？」（創世記三・九）

パウル・クレー「ドラマー」

若い力

私が洗礼のお恵みをいただいたのは今からたった５年前の事です。成人洗礼でしたので洗礼名を自分で選ぶ事ができました。洗礼名を選ぶにあたって、シスターに相談をしたり、聖人伝を読んだりしましたが、色々考えた末、やはり一番最初に候補に浮かんだものにしました。というより、初めから心に決まっていたのかもしれません。幼きイエズスのテレジアにしました。洗礼を受けてから数年が経ち、一時期は教会から少し遠ざかっていた時期もありました。日々の仕事や家庭の仕事に追われ、いつも心は疲れていたような気がします。洗礼を受けたばかりの頃は喜びに満ちていたのに、今の自分はキリスト者として一番遠いところにいるような気がしました。

遠藤周作の小説の中に、一人の修道女がある男性に送った手紙の文中で、ずっと心に残っている言葉があります。「私たちの信じている神は、誰よりも幼児（おさなご）のようになることを命じられました。単純に、素直に幸福を悦ぶこと、単純に、素直に悲しみ泣くこと、－そして単純に、素直に愛の行為ができる人、それを幼児のごときと言うのでしょう」この言葉を思い出す度、自分とひきくらべて反省します。いつもイライラしていた自分、神様にとってはどうでもよい事ばかりに必死になっていた自分。神様を中心に考えれば、日々の生活はそう悪くない。私は、幼児のようになりたい。人の目を意識する私でなく、神様の目を意識する私でありたいです。平凡な私には大きな事はできないけれど、小さなことを忠実に、日々神様への感謝の心で行っていきたいです。それが、洗礼名をテレジアにした理由です。まだまだ道は遠いですが、努力していきたいです。

中島町教会　池田典子

日韓青年交流二〇一〇
＝高松発＝ 釜山から慶州へ

桜町教会　川中翔太

八月十三日～十八日の間、溝部司教様と高松教区の青年を中心に十二名で韓国へ行ってきました。印象に残っていることをいくつか振り返りながら、この旅行の報告をさせて頂きます。

釜山ではまず、釜慶（プギョン）大学の青年と一緒になって海で遊び、夕の食卓を囲みながら交流しました。そして二日目には、釜山中央教会の青年達との交流ももちました。彼らと共に、司教様が幼少期を過ごされた家の辺りや歴史資料館を回り、日韓の歴史について真剣に分かち合いをしました。その分かち合いでは、「（歴史上の出来事から）日本はやっぱり赦せない」という素直な気持ちや「今こうして集まっている私たちが、これからの日韓の架け橋になっていくことがとても重要なのだ」という意見など、韓国に対する思い、日本に対する思い、これからの関わりについて、深く分かち合うことができました。青年達とのこうした交流会では、日本語・韓国語・英語と、いろいろな言語が飛び交っていましたが、お互いの心を感じる〝こころの会話〟で、それぞれがとても楽しい良い時間を過ごすことができました。

三日目には、慶州（キョンジュ）の良洞村（ヤンドンマウム）という昔の家屋のならぶ村や、世界遺産・石窟庵（ソックラム）へと行きました。そこで感じた古き時代の韓国とその生活や文化は、私たちに忘れていた大切な風景を思い出させてくれている気がしました。

この旅行は、日・韓の多くの方々に支えられて実現しました。私たちはよく知らなかった韓国という国を知り、心から身近に感じることができるとても素晴らしい経験をしました。この持ち帰った思いをまた次の世代へと伝えていきたいと思いつつ、これからも活動して行かれたらと思っています。・・・（神に感謝）。

子供たちに神様を伝えるには…

毎年、夏の初めに各小教区へ送られてくる「高松教区教会学校教師研修会開催のご案内」。２０数年前に私はこの会に誘われて始めて参加しました。

第３６回高松教区教会学校教師研修会

その時私は「何の会だろうか。どんな偉い人たちが集まる会なんだろうか」と少し構えてしまったのを覚えています。しかし、参加してみて名前の硬さとは似つかず、この会は子供が大好きで、子供達に神様のこと、イエス様のこと、聖書について、等々を子供達に伝えたいと思っている方々の集まりでした。名前についてはもう少しやわらかい名前にしたらという意見も出たこともありましたが三十六年前にこの会を立ち上げられた方々の思いが込められている名前です。今年会場教会となった郡中教会でも「第三十六回高松教区教師研修会のご案内」として二十七小教区にご案内を出しました。その中にアンケートも入れさせていただきましたが、アンケートにお答えいただいたのは十二小教区。

それによると、現在高松教区で教会学校（日曜学校・土曜学校）が開かれているのは十教会、子供の数も記入していただきましたが、「青少年がいない」という声をよく聞く割には、子供達はいるのだなといったものでした。

教会の未来を託す子供達を育てるという大切な責務を背負ったわたしたちが今年の研修会のテーマに選んだのは「神様を伝える～イエスの知っておられた父とは～」で、講師にSr中島俊枝様をお招きして第一日目にご指導をいただきました。

神様を伝えるためには、まず自分自身が神様にしっかり出会っていなければと自分の心の状態をチェックしながら、自然体で神様に出会うように導いてくださいました。それによって私たちは「神様に出会う道は　自分の中にある」と知らされました。

教会学校を始めたばかり、これから再度始めようとしている小教区からの参加もいただき、「青少年育成」の基となる「教会学校」の発展のためになる研修会になるようにとの願いは聞き入れられたと感じることができました。神に感謝！です。

子供のいないところには未来はありません。この大切な子供達を教会のみんなで育てていきませんか。参加教会が来年はもっと多くなることを願ってやみません。

人と人のつながり
アイヌ

第３６回
カトリック正義と平和全国集会
「真の共生社会を目指して」
人権委員会委員長イルダヤラージ

民族衣装を着けたアイヌの人たち

「アイヌ」とは何でしょうか。アイヌという言葉には「人・人と人のつながり・民族としての共同体」の三つの意味があります。二〇一〇年九月十八日～二十日まで札幌で〝第三十六回カトリック正義と平和全国集会〟が開かれました。テーマは「真の共生社会を目指して」で、安部ユポさんによる「アイヌ民族抵抗運動の歴史」の話しがありました。続いてアイヌ民族の親子による民族楽器の演奏と歌を聴き、大変感動を覚えました。

翌日はミサの後、数グループに分かれてワークショップが行われました。私は江別コミュニティーセンターのグループに参加しました。まずアイヌ民族料理をいただいてから、アイヌ出身でもある清水裕二先生の講話ではアイヌを受け入れない社会で、長い間出自を伏せていた事、大学卒業後教師となり祖母から詳しく聞いた話によって自らのアイデンティティーに目覚め、今ではどこででもアイヌである事を誇りにしている事等を聴きました。

彼によるとアイヌ民族の歴史は受難の歴史であり、日本政府や人々から言語や風習、伝統を拒否され続け、日本人より一段低い民族として扱われてきた。二〇〇八年六月に政府はアイヌを固有の言語、文化、宗教を持った原住民として認めたが、今なおアイヌ民族全てが何の問題もなく一般の日本人と同じ平和を享受しているわけではなく学校、職場でいわれなき差別が残っているとのことであった。このような話を聞いた後、アイヌ民族（受難の碑）の前でお祈りをして二日目が終わった。三日目は人権シンポジウムが開かれた。日本カトリック司教団は、「全ての人の人権を大切にするのは一人ひとりの務めではありませんか」と語りかけました。聖書にも、人間は「神の似姿として造られたもの」と、創世紀一章二十五～二十六節にあります。「神は言われた『我々にかたどり、我々に似せて人を造ろう・・男と女に創造された』」

日本に限らず世界中で、様々な理由で差別を受けている人がたくさんいると思います。でも、どんな人をも「人として」受け入れなければなりません。アイヌという語は「人」です。私たち誰もが「人」です。真の平和のうちに日常生活を送りたいなら、人を人として受け入れる事です。

アイヌの住居（展示用）

ちょっとひといき

うたたねの　わが胸に舞う　トンボかな
老いて尚　胸躍らせる　由布の嶺
うたせ湯に　青葉迫りて　人の尻

修士

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
まなび、護りましょう
暁　の　星　学　園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園

医療法人社団聖心会　阪本病院
看護師・准看護師
随時募集中です！
院内保育園開設

ご連絡を
お待ちしています。
連絡先（事務局）
0120-770-315

聖ドミニコ宣教修道女会

医療のともしび（23）

祈りと神聖な空間

整形外科をしている関係のため、担当する患者さんが亡くなるということに遭遇することは少ないのですが、心がけていることがあります。それは私が洗礼の勉強中に神父さんから教えていただいたことです。それは祈りをささげることです。

担当する患者さんの死が近いことを感じたとき、私はまず、シスターに祈ってもらっていいですかと家族に聞きます。命の水を授けて、祈ってもらうと天国が近くなることを言います。すると、今まで全ての家族がそう願われました。ですから、シスターに連絡をしてお祈りをしてもらいます。神様、イエス様、マリア様がそばにいてくれること、今まで一生懸命に生きてきたことについて、またその反対に、できなかったことへの負い目や罪が許されること、いつかは天国に帰っていくもので今そのときがきたことなどを話し、カトリックの祈りをささげます。

意識が十分でなくても、なにか伝わるものがあるのでしょう。すべての人が穏やかな顔になって旅立っていきます。そばにいる家族は泣きながらじっと聞いているのです。この空間はどう表現していいかわかりませんが、いわゆる神聖な空間といえます。そうしながら私はシスターが祈っている祈りを心の中で一緒にとなえます。

納棺師を描いた映画「おくりびと」の中の、ある場面ですが、「いってらっしゃい。また会おう。」というシーンがあります。わたしも同じように心の中で、この言葉をつぶやきながら祈ります。天国で、担当する患者さんに会うことを思うと楽しみになります。

本来、この水を授けることは一般信徒にも認められています。ゆえに私自身がしても良いのでしょうが、医師の立場からはしにくいと感じています。理由は医師の立場では患者さんの信教の自由に踏み込むことは難しいと感じているからです。そのため、シスターにお願いすることになります。将来、できないかもしれませんが自分で行えるようになれるといいと思っています。

病院としては、前月に亡くなった患者さんの家族に手紙を送り、親族を病院内の聖堂に呼んで、月に１回ミサをささげます。信教の差に関わらず全ての患者さんと家族のために祈りをささげています。

聖マルチン病院　田賀谷健一

教区スケジュール

１１月
- １日（月）諸聖人の祝日
- ２日（火）死者の日
  - 西川師と行くイスラエル聖地巡礼（～13）
- ３日（水）文化の日
- ６日（土）「女性の会大会」松山教会（環境問題と霊性）
- ７日（日）年間第３２主日
- ９日（火）ラテラン教会献堂
- １３日（土）人権委員会 13:00
- １４日（日）年間第３３主日
- １６日（火）日韓司教交流会in韓国（～18）
- １９日（金）司祭評議会 10:00
  - 宣教司牧評議会役員会 13:00
- ２１日（日）王であるキリスト　聖書週間（～28）
- ２３日（火）勤労感謝の日
- ２４日（水）生涯養成委員会 13:00
- ２７日（土）会計説明会（松山）
- ２８日（日）待降節第１主日（Ａ年）
  - 徳島地区「教区民の集い」
  - 会計説明会（高松）

１２月
- １日（水）司祭評議会 10:00
- ３日（金）フランシスコ・ザビエル溝部脩司教霊名の祝日
- ５日（日）待降節第２主日「宣教地司祭育成献金」
- ８日（水）無原罪の聖母マリア
  - 香川宗教者平和懇話会in桜町教会
- １２日（日）待降節第３主日
- １５日（水）生涯養成委員会 11:00
- １９日（日）待降節第４主日
- ２３日（木）天皇誕生日　青少年クリスマス会（高松）
- ２４日（金）クリスマス・イブ
- ２５日（土）主の降誕
- ２６日（日）聖家族
- ２７日（月）四国会館大掃除

聖マリ・ウージェニーの信仰と愛に学ぶ

聖母被昇天修道会の総長・顧問の来高を機に、第四回「聖マリ・ウージェニーと共に歩む集い」が九月八日マリアの家で行われ、約四十名が参加し和やかな雰囲気の中で実り多い集いで交流を深めた。懇談会でＡＴ（注参照）世界大会の報告として、父親の死に伴う土地の遺産相続をめぐる兄弟たちの紛争の解決に取り組み、和解に漕ぎ着けたルワンダでの活動や、各国、各地域の実情に即した活動の展開、聖マリ・ウージェニーの信仰と愛に学び貧困、災害、紛争に苦しむ人々への種々の活動を通じて、お互いの絆を強め、喜びを分かち合っている感動的な姿があった。

ウージェニーの集いで話に聞き入る

聖母被昇天修道会は現在、世界四大陸の三十四カ国、十六管区に、一一〇〇名のシスターが修道生活を行い、カリスマを共に分かち合って「この地上に神の栄光をもたらす」ため、また日本でも箕面（学校教育）、高松（幼稚園教育）、東京（小教区生涯養成）、西成（貧困者支援）の各地区で教育や生活の場を通して共に熱心な祈りと活動をしている。そして多様な仕事、温かい友情、深い霊性を通じて修道会を理解し、進んで共に歩む数多くのグループや人々がおり、ＡＴの精神が世界中に息づいていることが確認できた。一方、修道者の後継者の召命については、国によって事情は異なるが、総じて若い力を必要としており、神の恵みと私たちの祈りが切に求められていると痛感した。

懇談会全体の感想として「生活に根ざした信仰」と「社会に開かれた教会」を築くことは「共に喜びをもって生きる」ということである。つまり、生活から遊離した信仰、社会から遊離した教会であってはならないということである。これは、約二十年前に開かれた「福音宣教推進全国会議」（ナイス）の共通課題でもあった。今回の懇談会でこれらの課題が、世界的にも共通する課題であり、個人・家庭・社会の場で「生活から信仰を見直す」ことの大切さを改めて学ぶことができた。また、豊かさの中で貧しさが進む格差社会、高齢化の中で孤独死が増える無縁社会に直面している日本の現状にあって、キリストの福音をどう実現していくかについて多くの貴重な示唆が与えられた。

（注）
ＡＴ（Assumption Together）とは聖母被昇天修道会の精神や聖マリ・ウージェニーの生き方を心の糧にしたい・・という人々の集まりです。被昇天修道会のシスターの住んでいる国々に広がっています。

カトリック桜町教会　細谷正高

今いのちを見つめ直す時

「こうのとりのゆりかご」講演会

曽我部輝子

本講演会は毎年行われる日本カトリック医師会主催の、第二十六回医療関連学生セミナーの一環として、八月二十一日坂出グランドホテルで開かれ市民公開講座の形で、坂出市民や高松教区民に呼びかけたものです。

三年余の間何の補助金もなしに全くの無償の行為として、ゆりかごの運営を続けて来られた熊本市の慈恵病院の蓮田太二院長と田尻由希子看護師長をお迎えしました。残念なことに、蓮田先生は急用で講演の時間においでになれず、ＮＨＫで放送された先生のＤＶＤを見た後、田尻氏より、その活動の準備段階から、今に到るまでの成り行きと今後の願いが語られました。

最終日の分かち合い風景

特に、ゆりかご発足に伴って急増した妊娠葛藤相談は年間五百件以上、二十四時間年中無休でかかってくる電話に、三人の看護スタッフが常にやさしく対応するというものですが、ゆりかご以上に大事なことだと、述べられます。

ゆりかごは、平成十九年五月十日、わが国でも前例のない、命を守る取り組みとして、慈恵病院の手で始められました。それは産婦人科医蓮田先生の、何とかして、神様から授かった尊い生命と出産に悩むお母さんを救いたいという強い願いが始まりでした。

ドイツの赤ちゃんを助ける仕組みと、「ベビークラッペ」の視察を経て、地元関係者と議論を重ねながら、熊本市の認可を受け具体的な形となって三年、その活動は、今日も力強く続けられています。お二人とその協力者の熱意は、このセミナーの中での五島聖マリア病院のシスター梅木の言葉を思い起こさせました。それは、今日のカトリック医療を支えてきたものは、「助けを必要とする人々へのやむにやまれぬ思い」であったと。その後続けられたセミナーでは、お二人がその貴重なお話の中で訴えられたテーマ「いのちについて深く向き合ってください。若者の性意識を変えなければ。性には命の誕生があるということを、子供の時から家族や、学校で伝えて行かねば。」を深く受け止め、愛と性と命は同時に教えられるべきもの、我々は何らかの形でそれに取り組もうと決心しました。また、ドイツでは七十箇所のベビークラッペがあるそうですが、日本では一箇所のみ。セミナー参加施設の中から、後に続く病院が生まれることを願って会を閉じました。

新刊書籍紹介

■神父燦燦
―カトリック司祭58人に聴く―

神父たちの本音・つぶやき、満載。「神父さま」ってどんな人がどうしてなって、何をする仕事なの？

世界中から集まって日本で働く十人十色の神父たち。信者も知りたい彼らの素顔が、信者でなくてもよくわかる。元気と希望の人物図鑑！（評論家・山田五郎氏。オビより）。カトリック新聞に連載された人気コラム「神父燦燦」が１冊の本に。司祭への召命とその仕事がこの一冊でわかる！

Ａ5判 208頁　定価1260円
カトリック新聞社編　教友社

■　あぶうばぶう　福音、全開。

イエスさまがほら何かお話ししたそうですよ。もう安心。晴佐久神父があなたに贈る福音全開クリスマス。生まれたばかりでお話しできないイエスさまのところにやって来たのは、病気のめめちゃんが心配な羊飼いと、帰り道がわからなくて困ってしまった博士たち。心を開いてお祈りすると……。さあ、つぎに来るのはだれかな。

ぶん 晴佐久 昌英／え かにえ こうじ
A4判上製 31頁　定価1050円（本体1000円+税）
ドン・ボスコ社

土佐義和版画展　開催さる

高知市の閑静な住宅地の一角、星ケ丘アートヴィレッジにおいて１０月２日から１１日まで、オブレート会司祭土佐義和師（ザビエル・デルポート８３歳）の版画展が開かれた。

土佐師製作の版画４０点と、９８年からその表紙を飾っている季刊文芸誌も全冊展示され、観覧者はベルギーの古都ブリュージュの古い町並、運河に架かる橋や高知でおなじみの風景をモチーフにした作品など、その緻密な芸術作品にうなり声を上げていた。オブレート会ではチャリティー目的で師の版画を背景にしたカレンダーを製作し、その売り上げ金はハイチや世界の災害地等へ送られている。

編集後記

やはり季節は確実に巡るものだとつくづく思った。

高松教区報も一号また一号と原稿収集も間断がない。教区民の皆様のご協力に期待するほかない。

丸亀聖母幼稚園

整えられた環境の中で
自ら学ぶ力を育てる
モンテッソーリ教育
〒763-0048
香川県丸亀市幸町2丁目7-7
TEL/FAX　0877-22-4529
http://www4.plala.or.jp/marugameseibo/